山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第42号（2016.9）

台湾における初等中等芸術教育の実践

上原　一明・陳　玉玲[*1]

The Practice of Art Education in Elementary and Secondary Education in Taiwan

UEHARA Kazuaki, CHEN Yu-ling[*1]
（Received August 3, 2016）

キーワード：芸術、初等教育、中等教育、台湾

はじめに

近年、台湾では民主化に伴い、独自の文化創出に力を入れている。伝統的木彫芸術と現代的木彫芸術の促進（注1）や、国際的な木彫芸術シンポジウム開催（注2）など、官民あげての文化創出事業が活発化している。文化の創出は将来、その国の国力となりうるからであり、ヨーロッパの文化力＝国力がそれを示している。台湾は19世紀清朝の管轄以後、日本が50年間統治し、戦後は国民党が統治してきた。その後1996年の大統領直接選挙により民主化が達成され、2000年には初めて民主進歩党へ政権交代がなされた。歴史的に日が浅い中華民国としては、日本統治時代の文化遺産を包括した台湾本土化を象徴として、市民の芸術感覚を磨くことで、国民文化レベルの向上に寄与すると同時に、文化創出が将来の政治的優位性を確立し、視覚化された有効的な活動であると認識している。民主化に伴う台湾本土化は、学校教育においても変化がみられる。このような台湾における初等中等芸術教育の現在の一面を本論で取り上げる。

本論文は、第一章で上原が、新北市政府による文化活動を通して、初等中等教育における文化創出の実践について述べ、第二章では陳が、現代台湾の初等中等教育における情操教育について述べる。最後にこれらを総括して上原が台湾における初等中等芸術教育の実践の現在についてまとめる。

１．新北市政府主催による「玩美藝術節」

１－１　実施の経緯

新北市は旧台北県から市に昇格した台湾北部の都市で、台北市と基隆市を取り囲むかたちに位置している。人口は約400万人で、台湾の人口約2350万人の中で最大都市である。今回の「玩美藝術節」（Fun Art Festival）は、新北市内行政区（日本の町村に相当）の中で比較的辺境の地にある小学校や中学校及び社区（地域の公民館並びに文化センター）を対象とした芸術活動で、18区22か所で開催された。各小学校・中学校・社区に一名或いは一団体ずつアーティストが配属され、4日ないし5日間の日程で2，30人の児童又は社会人と共に作品を制作する。都市部の小学校児童・中学校生徒は、比較的美術館や野外彫刻を鑑賞したり、日常目に接する機会が多いが、地方の山間部や沿岸部などの、一学年5名から10名規模の小中学校児童生徒にはそういう機会は少ない。こういった児童生徒や社会人に対し、芸術創作の意義や作る楽しさを感じ取らせることにより、人と自然の情感や地域の特色と良さを認識させることを主な目的としている。

開催地の詳細は、石門区・乾華小学校、三芝区・福成社区、淡水区・下圭柔山芸術村、八里区・米倉小学校、泰山区・大科社区、三重区・集美小学校、板橋区・文聖小学校、鶯歌区・中湖小学校、中和区・漳和小学校、五寮小学校、新北市郷土文芸推進協会、金山区・金山小学校、豊漁社区、萬里区・萬里小学校、萬里

＊１　元私立稲江高級護理家事職業学校校長

中学校、汐止区・夢想社区、瑞芳区・猴硐小学校、貢寮区・貢寮小学校、平渓区・平渓小学校、雙渓区・牡丹小学校、石碇区・雲海小学校、坪林区・石碑社区となっている。(注3)

１－２　各開催地の活動内容

まずは小中学校で行われた活動内容を紹介する。三峡区の五寮小学校には、竹織作家・徐暋盛が「竹の王国」と題し、竹による伝統工芸を指導。石門区の乾華小学校には、木工作家・李進清が「自然美景」と題し、台湾最北端の学校で流木制作を指導。石碇区の雲海小学校には、現代アーティスト蘇子涵が「教科書には載っていない美麗資源」と題し、彩色樹脂での制作指導。平渓区の平渓小学校には、彫刻家・上原一明が「校園・環境・学校教育と芸術生活の緊密な接合」と題し、粘土原型による石膏レリーフと「平渓緑龍」を制作指導。金山区の金山小学校には、木彫家・曽俊豪が「学校に芸術の息吹を与えるのための複合芸術」と題し、ミクスト・メディアを指導。貢寮区の貢寮小学校には、木彫家・游宗穆が「流木は大海の匂いがする」と題し、流木アートを指導。萬里区の萬里小学校には、彫刻家・邱泰洋が「繽粉モザイク　道端に色彩を」と題し、モザイク制作を指導。同じ萬里区の萬里中学校には、彫刻家・施柏翔が「人文芸術に満ちあふれた臨海学校」と題し、魚のシリコン型をFRP（繊維強化プラスティック）で量産し、彩色指導した。雙渓区の牡丹小学校には、先住民彫刻家・尼誕達給伐歴が「芸術創作が運んでくれた楽しい笑顔」と題し、丸石に彩色したかわいい小鳥制作を指導。鶯歌区の中湖小学校には、アーティスト・廖麗華「紙の芸術」と題し、紙粘土造形に彩色指導した。

次に夏休み活動としての活動を紹介する。八里区の米倉小学校には、工芸作家・蘇素任が「伝統竹編技芸　古典芸術を体現」と題し、竹編みによる照明作品制作を指導。三重区の集美小学校には、先住民アーティスト・雷恩「硬い鉄材を軽く」と題し、風車制作を指導。中和区の漳和小学校には、工芸作家・黄耿茂と造形団体・グループ景茂芸術が「陶土芸術で囲まれた学校」と題し、陶土で動物制作を指導。板橋区の文聖小学校には、木彫作家・張國耀が「平凡な生活と非凡な芸術」と題し、割りばしによる立体造形制作を指導。瑞芳区の猴硐小学校には、アーティスト・胡達華「空き缶を利用したコラージュ」と題し、空き缶を釘で固定したコラージュ作品制作を指導した。

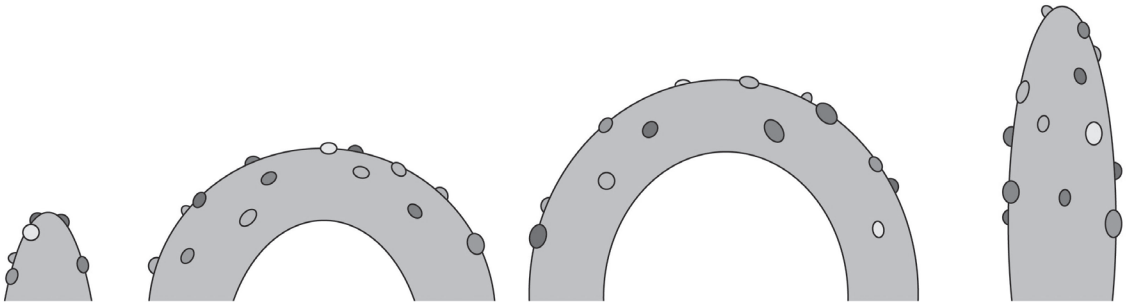
また、地域の公民館並びに文化センターとしての「社区」での芸術創作活動として、汐止区の夢想社区には、「美しい夢の芸術家　芸術生活の実践」と題し、紙で魚の帽子制作を指導。三芝区の福成社区には、池坊認定者・陳錦文が「生活と芸術の結合」と題して、生け花芸術を指導。金山区の豊漁社区には、木彫作家・李清榕が「流木の再利用　環境と生活の情感」と題し、流木彫刻制作を指導。坪林区の石碑社区には、花芸作家・古文旻が「自然植物からの資源　天然の桃源郷をつくろう」と題し、植物を使った花芸制作を指導。泰山区の大科社区には、竹織作家・徐暋盛が「竹編芸術創作　編み織社区環境美学」と題し、竹製品を指導。淡水区の下圭柔山芸術村には、彫刻家・楊成俊が「人文芸術・新しい産業の風格」と題し、竹と鉄骨によるインスタレーションを制作指導。新店区の新北市郷土文芸推進協会には、芸術団体（鐘瑞娥・林貞鈿・徐東成・戴世君）が「天然無害・環境創設生活」と題し、染め物を制作指導。同じく新店区の平潭社区発展協会が「共同創作で社区に輝きを」と題し、仮装行列用仮面及びオブジェを制作した。

このように、比較的辺鄙な場所に位置する小学校や中学校及び社区において、各分野のアーティスト達が様々なテーマにおいて、各施設で制作指導にあたった。これほどの広範囲で、なおかつ異なるテーマでそれぞれの作品を制作することは、あまり例をみない。特に小学生や中学生においては、通常の図画工作や美術の授業では経験できない授業内容であり、美術表現の多様性や作る楽しさを感じることができたであろう。

１－３　筆者の活動内容

ここで筆者（上原）の授業内容の詳細を紹介する。作品名である「平渓緑龍」とは、平渓地区の人と環境を守る守護神として緑色の龍を考案した。あえて頭部の口や目などの具体的な部位は作らず、見方によっては尾部が頭部にみえるように同じ形にした。体部の表面には丸い突起物があるが、それは平渓地区で採取した丸い川石を用いた。参加した児童達に採取してもらうことで、「自分が選んだ自分の石」という参加意識を高めるとともに、地元である平渓地区の石を使用しているということにも大きな意味を持たせている。

まずはメインの「平渓緑龍」の全体造形を制作した。5ミリ厚の段ボール板を組み、型を制作するのだが、型の制作を最小限にするため、全体の造形をシンメトリックすることで、型は半分だけで済むようにした。つまり、例えば球体を制作するのに一個の半球体型で、二個の半球体FRPを抜き、それらを合わせることで



緑龍　　上原一明

図１　筆者作品「平渓緑龍」　デザイン図

球体FRPを完成させるという方法である。これはシンメトリックな造形でしか対応できない。更に頭部と尾部及び胴体前部と胴体後部も一つの型で長さを変えて樹脂取りすることで、造形の変化を生むのである。つまり結果的に、頭部用段ボール型を頭部型２回、尾部型２回の計４回抜いて頭部と尾部を作成し、胴体前部用段ボール型を胴体前部２回、胴体後部２回の計４回抜いて胴体前部と胴体後部を作成したのである。これは非常に効率が良く、短期間でこれだけの規模の作品を制作するには驚くほどのスピードで実現させた。

平渓小学校からは、4年生、5年生、6年生のあわせて25名が参加した。各学年10名前後の小規模な小学校である。導入ではスライドを用い、「彫刻って何？」と題し、原始時代から現代にいたる彫刻制作の意義を説明した。その後、粘土に直接物を押し付けたり、反転した文字を刻んだりして「粘土型」をつくり、その型に石膏を入れ、硬化後石膏を取り出す。乾燥後、水彩絵の具で彩色し、表面を透明スプレーでコーティングして完成させる。これは形の反転の学習と石膏レリーフ制作の方法を学ぶことができる。

石膏レリーフ制作の次に、「平渓緑龍」の制作に移る。まず、児童が採取してきた石を「平渓緑龍」本体に接着し、児童が学年ごとに手分けして油性ペンキで色を塗る。一層目は発色を良くするために白いペンキを塗る。次に「平渓緑龍」本体の色を塗り、丸い石の部分を塗る。児童には、なるべく色は拡散させ、隣同士に同じ色をぬらないようにと指導する。どうしても数か所は隣同士に同じ色を塗っている箇所があったので、そこは指導講師（上原）が全体のバランスを見ながら調整した。

図２　作品本体制作中の筆者

図３　制作中の児童たち　①

図４　制作中の児童たち　②

１－４　本活動の成果

筆者の担当校に関して、作品本体は3週間かけて筆者が一人で制作したが、本作品のポイントである丸い石の扱いに関してはたいへん意義のあることであった。児童自らが採取した石が作品の一部となり、造形のアクセントと彩を与えていることに対し、参加した児童達は自分自身の存在を認識するであろう。「この石は私が採取してきた石で、この色は私が塗った」という制作参加した経験は、いつまでも各児童の記憶に残り、また再びこの「平渓緑龍」を見たとき、あの頃の思い出が蘇るであろう。また、創作することの楽しさやみんなで手分けして作る共同制作の大切さや達成感を感じることもできたであろう。

日本における初等科の美術教育は、創造することの楽しさを感じるとともに、思考・判断し、表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること、生活の中の造形や美術の働き、美術文化の関心をもって、生涯にわたり主体的にかかわっていく態度をはぐくむことなどを重視する（注4）とされている。台湾においても基本的には同様であり、更には地元の特色を重視することで郷土愛を育む傾向がある。１－２で挙げられた各開催地の活動内容を見てもわかるとおり、扱われた素材は流木や竹、川石など、地元で取れるものや、身近なものとしては割り箸、空き缶、ペットボトルなどの廃材利用がある。地元ならではの特色を再認識し、その良さや面白さを扱うことが郷土愛につながる。

各学校または社区で制作された多くの作品は、新北市立十三行博物館の広大な芝生公園に一堂に集められ、一か月間野外展示された後、各学校または社区に設置された。広範囲にわたる一連の活動の成果を一か所でみられるという方法もまた意義のあることである。自分達以外の学校でどのような制作活動がなされていたのかという興味や驚きがあると同時に、自分達が作った作品が広い野外に展示されているという達成感を味わうことができる。芸術、とりわけ美術は、心と体を使って物理的で視覚的な意味を持たせることで、メッセージを伝えることができる。作り手がどのような思いで制作したのか、また素材の持つ造形の美しさや構成の面白さがどのような効果をだしているのかなど、強く意識してみることにより、その奥底にある大きな意味を感じ取ることができる。美術表現は情操教育の中において、空間的時間や物質的存在をとおして自己表現の意義を認識させてくれる分野である。これら作品の形や色は、自分という確かな存在を認識させ、また他者に対してもモノとして、しっかり見えるかたちで伝えることができる。そういった美術表現は、人間の精神活動がより具現化され、独自に物体化され、やがて有形文化として伝わるものである。本活動は、人間として発達段階にある児童生徒達に対し、こういった芸術活動の意味や意義を考えさせるたいへん有意義なものとなったと考えられる。

図５　完成した「平渓緑龍」。新北市十三行博物館に一か月間展示後、平渓小学校に設置した。

２．現代台湾の初等・中等教育における情操教育について

２－１　21世紀に向けた、台湾初等・中等教育の国際教育と美育

1999年の「台北市教育白書」(1999年p. 1)によれば、1999年に公布した「教育基本法」には、教育目的として「国家意識および国際視野を持つ現代の国民を育成する」と述べれれている。その頃から、21世紀のグローバル化に向けて、言語力かつ国際視野を持つ人材育成に基づき、「台北市教育国際交流白書」などといった様々な政策が掲げられた。「台北市教育白書」（1999年p. 3-7）では、1998年度に始まった小学校3年生の英語教育は、2000年度より小学校1年生から始める。また、高校においては、日本語、フランス語、ドイツ語といった英語以外の第二外国語の推進や国際交流を広める、と述べられている。

陳玉玲・渋谷真樹の論文「台湾における国際バカロレア導入の現状－海外大学への進学と教育方法に着目して」（2016年p. 148）によれば、行政院が2002年に刊行した「挑戦2008：国会発展重点計画（2002-2007）」では、国民がグローバル化に対応する力をつけることが重要とされており、世界とつながる重要な道具として、とくに英語の積極的使用が奨励されるようになった。李振清は論文「提升英語能力、拓展國際視野」（2008年）で、効果的な英語の能力の向上によって、国民の国際的視野が広がり、現代社会にふさわしい優秀な人材を育成できる、と述べる。

一方、張武昌は論文「台灣的英語教育：現況與省思」(2006年)で、台湾の初等教育の英語教育には、生徒の英語レベルの格差、本国および外国籍の教員不足などといった問題、中等教育の英語教育には、進学するための受験英語に重点がある、と指摘する。現状の初等教育・中等教育の英語教育に合わせる教育政策改革、より効果的な教育方法と多様化教材の開発が必要である。しかし、多文化を理解し、国際的な視野を持つのは英語や第二外国語といった言語の教育だけでは不十分である。アメリカの教育哲学者のマキシン・グリーンは、「美的経験」を通じて、イマジネーションが働き、より広範な覚醒（wide-awakeness）の考えが持てるようになる。また、その実践によって、多文化の理解が可能とする「美的教育（aesthetic education）」を提案する[注5]。実際、「挑戦2008：国会発展重点計画（2002-2007）」（2002年）でも、広い視野かつ国際観の育成には、美育が教育の核となり、教員養成のプログラムに美育を取り入れるなどを含む美育の向上が求められるようになった[注6]。さらに、李は高校の英語教員の養成、また英語教育にマキシン・グリーンによる「美的教育」を盛り込むことで現状にある英語教育の問題解決に繋がる、と述べている。

２－２　筆者が行った美育・言語教育・国際教育

筆者（陳）が2010年までに校長として務めた、台北市にある稲江高級護家事職業高校（日本の商業高校に相当）は、1939年に開校され、現在、家政科、デザイン科、美容科、調理科、幼児教育科、および日本語・

英語の外国語科がある[注7]。およそ2000名の女子生徒が在籍する職業高校である。必修の第二外国語は英語と日本語二つであるというユニークな学校である。日本語・英語科が開設される1999年前から筆者は申請準備、カリキュラムの編成などに携わってきた。より生きた言語教育を推進するため、当校は1999年から日本（のちカナダを追加）との遠隔教育を開始し、2000年より年間およそ３回、日本の高校・玉川学園に一ヶ月の短期留学（のちカナダを追加）プログラムを実施するようになった。

一方、「台北市教育国際交流白書」に基づき、経済的などの理由で留学プログラムに参加できない当校の生徒の学習意欲を高める。また台湾でアメリカなどの英語圏の文化より日本文化に触れる機会が少ない理由で、当校の生徒と台北市の中学生・高校生を対象に、2003年より年に一度、日本の文化を体験する「日語外交小尖兵」イベントを開催するようになった。そのほか、2006年より毎年、各クラスの日本語と英語に関心のある生徒を対象に、イギリスのハイティーを楽しみながら筆者がイギリス、日本の留学および海外の体験について話したり、毎年、高校3年生全員に国際教育についての特別授業を開催した。

図６　筆者が行ったハイティー特別授業

図７　よさこいの授業（2007年）

ここで、「日語外交小尖兵」のイベントについて説明する。開催当時は、日本語、日本の美術や茶道、浴衣の着付け、和菓子作りといった国内の講師（筆者の上原を含む）による授業体験が中心であった。その後、国内の講師以外に、日本から専門家を招聘し、一日の体験イベントを開催するようになった。例えば、2006年はプロジェクトアドベンチャー（PA）体験学習、2007年は日本舞踊家たちによるよさこい祭りの踊り、そして、2008年は元歌舞伎役者による歌舞伎といった体験もできた。日本の文化の美しさを目で見て、耳で聞き、声を出して確認し、体を使って体験するという美育を取り入れた言語・国際教育の理想的なモデルである。

図８　イベントの最後に「連獅子」を鑑賞（2008年）

２－３　台湾の美教育の現状

「挑戦2008：国会発展重点計画（2002-2007）」の一貫として、2013年に教育部が「美感教育中長程計画（2014-2018）」を発表した。その計画に基づき、義務教育課程に美育の取り込み、教職員の芸術・美感知能研修、「幼児園美感及藝術教育札根計画」、「亜太地区美感教育研究室（Asia-Pacific Office for Aesthetic Education）」（以下APOAE）の設立といったプロジェクトがある。ここで、APOAEの役割について説明する。APOAEは、アジア地域の美教育について研究し、専門家と共に、複数の科目といった連携モデルに美育を盛

り込む実験課程について開発し、また実験課程を実施する初等・中等教育の学校をサポートする。

現在、「生活與環境課程實驗」（台北郊外三つの小学校）と「聲音與身體課程實驗」（台北市永春高級中学校の実験方案が実施されている。「生活與環境課程實驗」の方案について説明する（注8）。2014年に始めたこの方案は、2014年に「生活と環境」という空間美学が核となり、「存在美学」、「公民美学」、および「生態美学」を軸として展開していく美学実験教育の実施が目的である。実験対象となった小学校は、新北市淡水区鄧公小学校と忠山小学校、新竹県新埔宝石小学校の３つである。

まず、鄧公小学校では、APOAEの専門家たちと実験に参加する教員たち授業の内容や方式を決め、保護者と教職員たちに参観できるようにしたのである。2014年6月24日から三日間にわたり、「身体測定と環境」、「空間と記憶」、「色と時間」など各学年１クラス、合計５クラスの授業が行われた。行った授業が優れた教員たちは、APOAEがプロジェクトに参加する教員を対象に開催する講座の講師となる。

忠山小学校では、2014年11月18日から一ヶ月にわたり、生徒と教員が一緒に学校の「美感地図」の実験課程を行った。一週目は、APOAEの専門家と鄧公小学校の教員が忠山小学校の教員全員を対象にプロジェクトの理念、目標などについての説明を行った。二週目は、学校地図に好きな場所と好きではない場所を明記し、その理由を記入する。半日の授業を行って、改善する所と方法を検討し、改造計画を決める。その日の午後は、教員たちは授業で行ったこと、生徒たちの考えについて話し合うのであった。三週目から四週目は専門家と環境関係の学科に在籍する大学生は、4年生、5年生、6年生の児童と話し合い、決めた改造計画を全校生徒に発表した。最終的に決めた改造計画は、2018年まで実施することになったのである。

新竹県の新埔宝石小学校では、三日間にわたり、1年生、2年生、および６年生を対象行ったのは、「宝石国小空間配置」、「校園探索」、「家裏面的空間」、「我的城堡－立体構成」などのテーマといった「芸術と人文」の実験課程である。

APOAEは今後より多くの学校が参加できるように、実験課程に興味のある教員たちを対象に、実験課程を実施した教員たちの感想や、今後の展望などについて講座を開催し、更に方案を追加している。

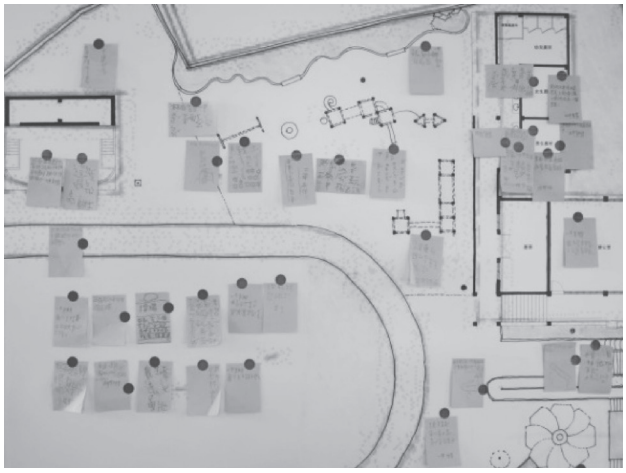


図９　学校の「美感地図」（出典：APOAEのHP）

図10　学校の改造計画授業（出典：APOAEのHP）

３．まとめ

本論では、まず新北市政府主催による「玩美藝術節」の開催内容を取り上げ、行政による美術教育の普及について述べた。児童生徒にとっては、通常の図画工作や美術の授業では学べない、特別な美術のワークショップを体験することにより、地域の特色や制作することによる表現の多様性を学ぶことができた。また、一般の社会人を対象とした各社区の活動においても、アーティストの指導による本格的な作品制作を体験することにより、日常生活をより豊かに彩る美的感覚を培うことができた。続いて、現代台湾の初等・中等教育における情操教育について、台湾の初等・中等教育の国際教育と美育として、21世紀のグローバル化に向け、言語力かつ国際視野を持つ人材育成に基づいた、「台北市教育国際交流白書」などといった様々な政策が掲げられたことを述べた。また台北市にある伝統校・稲江高級護家事職業高校の、語学や異文化に対する取り組みを紹介した。最後に台湾の美教育の現状については、「亜太地区美感教育研究室（Asia-Pacific Office for Aesthetic Education)」（以下APOAE）の設立といったプロジェクトを紹介し、新北市の小学校二校と、

新竹県の小学校一校の具体例を紹介した。

このように現在の台湾の情操教育においては、郷土の良さを再認識することや、グローバル化に対応した、様々なプログラム実践の重要性を重視した活動が数多く行われていることがよくわかる。前出の「玩美藝術節」における招聘アーティストは、本省人、外省人、先住民、日本人、と出身が異なる人選であることからもそれらをうかがい知ることができる。また、台湾においても初等中等教育の重要性を重視しており、ここであえて語学に関して言及すれば、「國語」（いわゆる北京語を母体とした中国語）教育が浸透したため、都市部において方言を話す若者が減少してきたことを危惧し、方言の多数派である台湾語（閩南語＝福建省南部の言語）の語学教育が見直され、少数派である客家語や各先住民語の保護及び伝承教育も実践されている。実際、台北市内を縦横に運行する捷運（MRT）の各駅到着アナウンスにおいても、中国語→台湾語→客家語→英語の順で案内されている。言語とは民族の存在を証明するものであり、台湾本土化に伴う台湾アイデンティティ強化とグローバル志向の表れでもあるといえる。

翻って、初等中等芸術教育においては、様々な分野で郷土回帰とグローバル志向が両輪のように回転しており、確実に新たな創造的感覚の育成を促進し、未来に向かって順調に進んでいる。本論においては、立体造形を中心とした美術や伝統工芸の制作、言語学習、異文化学習、生活と環境学習、都市計画の実験的考察など、多岐にわたる分野で実践されていることを紹介できたと同時に、新たな提言を示唆する材料を提供できたのではないかと思う。

注釈

１）上原一明・頼永興：「台湾の木彫芸術について」，山口大学研究論叢，2012年.
２）上原一明：「台湾の芸術文化振興についての考察-木彫創作活動を中心に-」，山口大学研究論叢，2014年.
３）中国語では「〇〇國民小學」と表記するが、本論文では全て日本語訳の「〇〇小学校」とした。
４）小学校学習指導要領解説　図画工作編　平成20年8月版　P.3　図画工作改定の趣旨
５）「Maxine Greene Center」ホームページより　https://maxinegreene.org/index　(2016年７月5日)
６）ここでいう美育とは、台湾の五育（徳、智、体、群、美）の美育である。
７）台湾は60－70年代に働く若者が多かったため、高等学校より高等職業高校のニーズがあった。当時、高等職業高校の数に対して、高等学校の数は６対４の時代だった。現在、台北市の高等学校数は56校、高等職業高校は26校である（出典：台北市教育局ホームページhttp://www.doe.gov.taipei/　2016年７月20日閲覧）
８）「生活與環境實驗方案」　亜太地区美感教育研究室ホームページより　http://apoae.naer.edu.tw/research/子計畫一.html（2016年７月15日閲覧）

参考資料

1)「玩美藝術節　－新北玩美創作」，新北市政府文化局出版，2015年.
2)「玩美藝術節」ホームページ　http://www.play-art.com.tw/
3)「台北市教育國際交流白皮書」，台北市教育局，1998年.
4)「台北市教育白皮書」，台北市教育局，1999年.
5)「挑戦2008：国会発展重点計画(2002-2007)」，行政院，2002年.
6)「美感教育中長程計画第一期五年計畫（103年至107年）—臺灣・好美、美感從幼起、美力終身學」，台北市教育局，2013年.
7)「亜太地区美感教育研究室の紹介」「亜太地区美感教育研究室報告書」ホームページ　http://apoae.naer.edu.tw/
8）張武昌：「台灣的英語教育：現況與省思」，教育資料與研究月刊，第69期，pp.129-144，2006年.
9）陳玉玲・渋谷真樹：「台湾における国際バカロレア導入の現状－海外大学への進学と教育方法に着目して」，奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要，第２号，pp.147-155，2016年.
10）李宜臻,「Maxine Greene的美育思想對高中英語教育之啓示」，國立彰化師範大學教育研究所，2012年.
11）李振清，「提升英語能力，拓展國際視野」，台湾教育，第625期，pp.13-21，2008年.